

学習英和辞典における話者の確信度を表す副詞に関する記述についての考察と提言

吉川 勝正

要 約

話者の確信度を表す副詞、probably, likely, maybe, perhaps, possibly が英和辞典でどのように説明されているかを調査した結果、日本語でそれぞれの語に近い確信度を表す言葉がないせいで、確信度を数字 (%) を用いて説明していないために、それらの副詞の意味が分かりにくいものとなっていることが判明した。本稿では、主に数字 (%) で確信度を示し、補助として、日本語による説明を加えることを、より分かり易い方法として提案した。

1. はじめに

本稿では現行の英和辞典において、話者の確信度（現在の事柄に関して事実か否についての確信度、さらに未来の事に関してはそれが起こる可能性についての確信度のことで、辞典によっては可能性や確実性と表記してあるものもある）を表す副詞、probably, likely, maybe, perhaps, possibly について、どのような説明がされ、またどのような例文や訳が添えてあるかを分析し、検討する。

筆者の勤務校の学生達が、これらの副詞について、話者の確信度が異なることを理解していないことが授業で感じられたことに加え、同僚の母語話者教員が独自教材を用いて、確信度の違いを丁寧に指導していることを知ったことも、きっかけとなった。

英語の母語話者にとって、これらの副詞の確信度の違いによる使い分けは大切なことであるのに、日本人学習者が十分に理解していないとすれば、その一因が英和辞典での記述にもあるのではないかと考えられ、調査するに至った。もちろん、他の要因として、和英辞典や高等学校で副教材のような形で利用されている学習参考書や文法書が考えられうるが、今回は、英和辞典に限定して調査をすることにした。

本研究の意義としては、probably, likely, maybe, perhaps, possibly に関して、英和辞典の説

明の問題点を指摘し、改善を提案できれば、上記の副詞について、日本人英語学習者の正確な理解と使用に多少なりとも寄与できるかもしれない点であろう。

2. 学習英和辞典における、probably, likely, maybe, perhaps, possibly に関する記述

2.1. 分析対象辞典

本研究では以下の辞典について分析を行った。大辞典は高校生や大学生が、普通の学習で利用していないと思われるので、分析の対象より外した。

1. 浅野博編 (2010) 『アルファフェイバリット英和辞典』第2版 東京書籍
2. 浅野博・阿部一・牧野勤編 (2011) 『アドバンストフェイバリット英和辞典』初版 東京書籍
3. 井上永幸・赤野一郎編 (2007) 『ウィズダム英和辞典』第3版 三省堂
4. 木原研三監修 (2010) 『グランドセンチュリー英和辞典』第3版 三省堂
5. 小西友七・南出康世 (2007) 『ジーニアス英和辞典』第4版 大修館書店
6. 竹林滋・小島義郎・赤須薫 (2008) 『ライトハウス英和辞典』第6版 研究社
7. 竹林滋・小島義郎・東信行他編 (2006) 『ルミナス英和辞典』第2版 研究社
8. 竹林滋・東信行・諏訪部仁他編 (2009) 『新英和中辞典』第7版 研究社
9. 田中茂範・武田修一・川出才紀編 (2003) 『Eゲイト英和辞典』初版 ベネッセ
10. 野村恵造他編 (2014) 『コアレックス英和辞典』第2版 旺文社
11. 花本金悟・野村恵造・林龍次郎編 (2012) 『オーレックス英和辞典』初版 旺文社
12. 山岸勝栄他編 (2008) 『アンカーコズミカ英和辞典』初版 学習研究社
13. 山岸勝栄他編 (2015) 『スーパーアンカー英和辞典』第5版 学習研究社
14. 八木克正他編 (2005) 『ユースプログレッシブ英和辞典』初版 小学館
15. リーチ ジェフリー・池上嘉彦 (Co-chair) (2007) 『ロングマン英和辞典』初版 ピアソン・エジュケーション

以降、上記の辞典は番号で示すこととする。

2.2. 各辞典の記述内容と問題点の指摘

本稿では、項数の関係で、それぞれの副詞の文修飾の用法の二つ（普通の平叙文と対話文）に絞り、例文と訳を見ていく。辞書によっては片方の例文しか載せていないものもあるので、その場合は、片方のみの記述となる。では、1より順次、見ていく。

1 は高校生用の学習英和辞典の中でも、語彙数が約 4.6 万語と比較的少ない。probably (p. 1033) では、まず訳語として「たぶん、おそらく、十中八九」を挙げてあり、「たぶん」は赤字になっている。例文と訳は、次の通り。He will probably call me tonight. (おそらく彼は今晚電話をくれるだろう。) と “Is she home now?” “Probably. [Probably not].” (「彼女は今家にいるかな?」「たぶんね。」「たぶんいないよ。」)。この後に類語の副詞との比較の欄がある。一番上に certainly と surely が挙げてあり、その訳語には「確かに、きっと」を添えてあり、確実性としては、90% 以上としてある。次に、この probably があり、訳語には「たぶん、おそらく」があり、確実性は 50% ~ 90% となっている。この次に、perhaps, maybe, possibly の 3 語が一緒に書いてあり、訳語としては「もしかすると、ひょっとすると」が挙げてあり、確実性は 50% 以下となっている。一番下には、never があり、訳語は「決して…ない」を挙げてあり、確実性は 0% となっている。この欄では、likely と possibly は取り上げてはいない。

likely (p. 752) に関しては、訳語として「たぶん、おそらく」を挙げ、「probably と同じ」としている。例文と訳は、He is likely at home. (彼はおそらく家にいるだろう。) になっている。

maybe (p. 802) については、訳語として「ひょっとすると、ことによると、…かもしれない」が挙げてあり、「ひょっとすると」は赤字になっている。「perhaps よりくだけた語」とあり、perhaps と probably を参考にするよう案内がある。例文と訳は、Maybe you can do it. (君ならできるかもね。) Maybe, she will be there, and maybe she won't. (彼女はそこにいるかもしれないし、いないかもしれない。) になっている。次に対話の疑問文の場合を取り挙げ、訳語として「さあどうだろうね、かもね」を与えている。例文と訳は、“Are you going to the party?” “Maybe.” “[Maybe not.]” (「パーティーには行くの?」「そうだねえ。」「どうかなあ。」) になっている。

perhaps (p. 971) では訳語として「もしかすると、ひょっとすると、たぶん」を挙げてあり、初めの二語は赤字になっている。例文と訳は、Perhaps I'll call on you next week. (もしかすると来週お宅に伺うかもしれません。) “Will it rain tomorrow?” “Perhaps. [Perhaps not.]” (「あした雨振るかな?」「降るかもね。」「たぶん降らないよ。」) になっている。この下に perhaps の用法という枠で囲んだ欄があり、「perhaps は maybe と同じ意味だが、米口語では maybe の方がよく使われます。perhaps は起きる確立が 30 ~ 50% ぐらいだと思われる場合に用います。」とあり、加えて類語の probably を参照するような案内もある。

possibly (p. 1012) については、訳語として「ひょっとすると、ことによると、たぶん」の 3 語を挙げ、「ひょっとすると」は赤字になっている。そして類語の probably を参照するよう案内がある。例文と訳は、Possibly he has forgotten to come here today. (ひょっとすると彼はここに来るのを忘れていたかもしれない。) “Was he angry?” “Possibly.” “[Possibly not.]” (「彼は怒っ

ていたのかな?」「ひよっとしたらね。」「たぶんそれはないよ。』) になっている。

2は1と出版社が同じで編集委員や執筆者も一部重なっている。姉妹辞書のような関係のようである。1の収録語彙数が約4.6万語に対し、2は約8.6万語と多い。probably (p. 1469) では、訳語に「たぶん、おそらく、十中八九」を挙げ、最初の「たぶん」は太字になっている。そして「perhaps, maybe より起こる公算が大きい」とある。更に、perhaps のところを参照するような案内がある。例文と訳は、You are probably right. (君の言い分おそらく正しい。) Fish in the aquarium died, probably there was little oxygen. (水槽の中の魚は死んでしまったが、おそらく酸素がほとんどなかったからだろう。) “Will she home now?” “Probably.” “[Probably not].” (「彼女は今家にいるかな。」「たぶんね。」「たぶんいないよ。』)

likely (p. 1088) では、訳語として「たぶん、おそらく」を挙げ、「たぶん」が太字になっている。そして「英では通例 very, most, quiteなどを前に伴う」とある。その直後に (probably) とあるが、これは probably と同じ意味ということなのか、参照せよという意味か分からない。例文と訳は、次のとおり。Most likely it will rain tomorrow. (おそらく明日は雨になるだろう。) The opening time of the show will be delayed. (おそらくショーの開演時間は延びるだろう。) 前に most が置かれている場合と、likely 単独で用いる場合の訳が同じになっているが、これでは、話者の確信度が同じに思われまいそうである。

maybe (p. 1158) に関しては、先ず「口語的」とあり、訳語として「ひよっとすると、ことによると、もしかすると; あるいは、おそらく」を添えている。ここでも perhaps を参照するような案内がある。例文と訳は、Maybe you can. (君ならできるかもよ。) Maybe he will be there, and maybe he won't. (彼はそこにいるかもしれないし、いないかもしれない。) となっている。次に「会話、質問を受けて」との項を設け、訳語として「どうだろうね、さあねえ(確信のもてない内容に対して、また、yes で no でもない消極的返答に用いる。)」を挙げている。例文と訳は、次のとおり。“Will it rain tomorrow?” “Maybe.” (「あしたは雨かな。」「そうかもね。」) “Are you going to the movie tonight?” “Maybe or maybe not.” (「今夜映画に行く?」「なんとも言えないね。』)

perhaps (pp. 1381-1382) では訳語としては「もしかすると、ひよっとすると、ことによると、たぶん」を挙げ、「口語的で maybe と同じ意味」とある。例文は他の語より多く、次のとおり。Perhaps I'll call on you next weekend. (もしかすると今度の週末お宅に伺うかもしれません。) I can't sleep; perhaps it's because of the coffee. (眠れないなあ。たぶんコーヒーのせいだろう。) “Will you be there tomorrow?” “Perhaps” (「あしたそこに行く?」「たぶんね。』) “Will it rain tomorrow?” “Perhaps not” (「あした雨が降るかなあ。」「たぶん降らないよ。』) The bus may

perhaps have just left. (バスはもしかしたらちょうど出てしまったところかもしれない。)[may と共に perhaps を用いる場合、確実性・可能性がさらに低いことを表す。]との注意がある。Perhaps the most important thing is the chief's approval. (おそらくいちばん重要なことは長官の許可であろう。)最後に1と同様に、類語に関してまとめた欄があり、次の説明がされている。表の一番上に、certainly があり90%以上となっていて、対応する助動詞として will と must が添えてある。次には probably があり50~90%とあり、対応する助動詞として should が挙げられている。その下には、perhaps, maybe, possibly があり、50%以下とあり、対応する助動詞としては may, might, can, could が挙げられている。一番下には never があり0%とある。対応する助動詞はない。この辞書でもこの欄では、likely と possibly を取り上げていない。

possibly (p. 1439) では訳語として「ひよっとすると、ことによると」を挙げて、「ひよっとすると」は太字になっている。また、perhaps を参照するように案内が出ている。例文と訳は、以下のとおりである。Possibly she has forgotten to come here today. (ひよっとすると彼女はきょうここに来るのを忘れていたのかもしれない。)"Was the driver drunk?" "Possibly." "[Possibly not]." (「運転手は酔っていたのだろうか。」「ひよっとしたらね。」「たぶんそれはないだろう。」) This is possibly the most beautiful landscape in California. (ここはもしかしたらカリフォルニアで最も美しい場所かもしれません。)

3の probably (p. 1500) では、先ず訳語として「たぶん、おそらく、十中八九」を挙げ、「たぶん」は赤字になっている。その後、may, perhaps, apparently を参照するようになるとの案内があり、確信度については、perhaps, maybe よりも高いとある。例文は以下のように多い。It will probably rain this afternoon. (午後はたぶん雨だろう。) It's probably because he was drunken then. (たぶんそれは彼がそのとき酔っていたからだろう。)"Will you be home late again?" "Probably." (「また帰りは遅くなるの?」「たぶんね。」)"He wasn't serious, was he?" "Probably not (, no)." (「彼は本気じゃなかったんだろ?」「たぶんね。」「きっと違うよ。」) You're probably right. (たぶんあなたは正しいでしょう。) as you probably know (おそらくご存知の通り) They probably thought you were crazy. (ことによったら彼らはあなたが気が狂ったのだと思ったのかもしれない。)この後に「断定を避けることで相手を傷つけない働きをする。」との注がある。上では、perhaps や maybe よりも確信度が高いと説明があるのに、ここでは、確信度が低い訳(ことによったら)になっており、補足説明の部分だけでは、戸惑いを感じてしまいそうである。%による確信度の説明はない。

likely (p. 1118) では、訳語として「おそらく、たぶん」を挙げている。その後「通例、very, more, most を伴う。」とある。例文と訳は、次のとおり。The same thing will (most) likely

occur here. (同じ事がここでもたぶん起きるだろう。) Very likely, you are right. (たぶん君が正しい。) Such a bill would likely face strong opposition. (そのような法案は強い抵抗を受けるだろう。)

maybe (p. 1192) では、訳語としては「もしかすると、たぶん、おそらく」を添えて、「たぶん」が赤字になっている。また、perhaps を参照するように案内が出ている。例文と訳は、次のとおり。Maybe I'll see you tomorrow. (もし会えたらまた明日ね。) "It's Lucy." "Maybe and [but] maybe not." (「ルーシーだ。」「そうかもしれないし「が」、そうでないかもしれない。]) Ken will maybe not come to the party. (健はパーティには来ないかもしれません。) 次ぎに「返答」の項を設け、訳語としては(同意も反対もしかねて)「たぶんね、そうかもしれないね、そうですね」を挙げ、「たぶん」が赤字になっている。例文と訳語は、次のとおり。"Can I go to Chicago with you?" "Maybe." (「私もシカゴ行きにご一緒してもいいですか。」「そうですね。」)

perhaps (p. 1418) では、訳語として「ひよっとすると、おそらく、かもしれない」を挙げ、「ひよっとすると」が赤字になっている。例文と訳は、次のとおり。Perhaps, you have heart disease. (ひよっとすると心臓病かもしれません。) "Is he coming to the party?" "Perhaps (so)." "[Perhaps not]" (「そうかもね。「それはないんじゃないの。」) Tradition is perhaps the most basic concept of conservatism. (伝統は保守主義のおそらく最も基本的な概念だ。) この後に「最上級の前で用いられた perhaps は控えめに表現することで逆に判断の正しさを強調する。」との説明がある。この後に枠で囲んだ欄があり、確信度について、次の二つの説明がされている。「maybe と同様に 30 ~ 50% の確信度を表す」、「以下の順で低くなる。definitely (確実に), no doubt, doubtless (間違いなく), almost certainly (ほぼ間違いなく), presumably (どうやら), probably (たぶん, 十中八九), hopefully (うまくいけば), perhaps, maybe (ひよっとすると), possibly (ことによると)」との説明がある。この辞書の perhaps に関する説明は他の辞書よりも詳しい。

possibly (p. 1474) については、訳語として「ことによると、もしかすると」を挙げ、「ことによると」が赤字になっている。そして、ここでも perhaps を参照するように案内がある。例文と訳は、次のとおり。Possibly we'll have rain this week. (もしかしたら今週は雨になるかもしれない。) Quite [Very] possibly. (十分可能性がある) "Will he come to the party?" "Possibly." (「彼、パーティに来るかな?」「ひよっとしたね。」) この辞書はどの語に関しても説明が詳しい。

4 の probably (p. 1175) では訳語として「おそらく、たぶん」を挙げ、「おそらく」は赤字になっている。また、perhaps と maybe を参照するような案内がある。例文と訳は、He'll probably come back soon = It is probably that he will come back soon. (たぶん彼はすぐ戻ってくる。)

It will probably rain. (たぶん雨でしょう。) “Will you come?” “Probably.” “[Probably not.]” (「あなたは来ますか。」「たぶん。」「たぶん来ない。」)

likely (p. 873) では訳語として「(most, very などをつけて) たぶん, おそらく」を挙げている。赤字の訳語はない。また、類語の maybe を参照するようにとの案内がある。例文はなく、very (most) likely (十中八九, たいがい) が紹介されており、「《米口語》では、most, very などをつけずに単独で用いるのが普通。」とある。

maybe (p. 930) では訳語として「もしかしたら, ことによると, たぶん」を挙げ、「もしかしたら」が赤字になっている。例文と訳は、次の通り。Maybe he is right, maybe he isn't. (彼の言い分が正しいかもしれないし, 正しくないかもしれない。) “Is he coming?” “Maybe not.” (「彼は来るだろうか。」「ひょっとして来ないかも。」) 次に類語に関する説明として以下がある。「maybe は, 主に米国で使われ, 英国では一時古風になっていたが perhaps より口語的な語として現在はよく使われる。probably → likely → maybe → possibly → perhaps の順で可能性が低くなる。」この辞書では他の大半の辞書とは異なり、possibly が perhaps より確信度が高くなっている。

perhaps (p. 1106) では訳語として「ことによると, ひょっとしたら, たぶん, おそらく」を挙げ、「ことによると」と「たぶん」が赤字になっている。例文と訳は、次のとおり。Perhaps I'll change my mind later. (ことによると私はあとで気が変わるかもしれません。) “Will you be able to come here again this summer?” “Perhaps not.” (「この夏もう一度ここに来られますか。」「たぶんだめでしょう。」) この後に、「perhaps は probably に比べ, 事に起こる可能性が少ない時に用いる。maybe を参照」とある。ただ、probably との訳語を比較すると、「たぶん」と「おそらく」が共に訳語として挙げてあり、違いが明確には分かりにくい。

possibly (p. 1151) では訳語として「ことによると, もしかすると」を挙げ、「ことによると」が赤字になっている。この後に類語の説明として「possibly は probably に比べて, 事の起こる可能性が少ない時に用いる。maybe を参照」とある。例文と訳語は、次のとおり。Possibly you are right, but I think differently. (もしかするとあなたが正しいかもしれないが, 私の考えは違う。) “Will he pass the examination?” “Possibly.” (「彼は試験に合格するだろうか。」「ことによるとね。」)

5 の probably (pp. 1661-1662) では、訳語として「たぶん, 十中八九, おそらく」を挙げ、「たぶん」が太字になっていて、perhaps を参考にするよう案内がある。最初に次の熟語が挙げられているが例文はない。most (very) probably (ほぼ確実に) 他の例文と訳は次のとおり。I was not able to concentrate on my work, probably because I was too tired. (たぶん疲れていたせい、仕事

に集中できませんでした。) Probably (ㄨ) she will come = She will probably come = It is probable that she will come. (彼女は十中八来るだろう。) Probably he (He probably) can't succeed. (彼は成功できないだろう。) She probably has read [英 has probably read] the book. (彼女はたぶんその本を読んでしまっただろう。) 次に「相手の質問を受けて」とあり、「たぶんそうでしょう」(完全な同意から一步引いた同意を表す)の訳語が挙げてある。例文と訳は、次のとおり。“Is she going to study France to study painting?” “Probably.” (「彼女は絵の勉強のためにフランスに行くんですか。」「たぶんそうでしょう。)」 “Do you think she can keep the secret?” “Probably not.” (「彼女は秘密が守れると思う?」「たぶん守れないと思う。」)

likely (p. 1236) では、訳語として「たぶん、おそらく」を挙げ、「たぶん」が太字になっている。その後に「米略語では通例単独で用いるが、英では very, most, more を前に置くのが普通」とある。例文と訳は次のとおり。He will likely be in Paris tomorrow. (彼はたぶん明日はパリにいるだろう。) Most likely she will refuse the offer. = She will most likely refuse the offer. (彼女はおそらくその申し出を断るだろう。)(= It is most likely that she will refuse the offer. ということもできる) この辞書でも、very, more, most を前に置いた場合と、単独で用いた場合の確信度の違いは、訳語に反映させていないので、違いがあるのかどうか分からない。

この辞書の maybe (p. 1313) では、用法を細かく分けて、それに応じて訳語を与えている。まず「ことによると、もしかしたら、ひょっとしたら」を挙げている。初めの二つの訳語は太字になっている。さらに「話し手の意識としては起こる確率が5割程度、話し手の確信度は probably, maybe, perhaps, possibly の順に弱くなる」とあり、perhaps を参照するよう案内がある。ここでは起こる確率が5割程度と書いてあるが、perhaps のところでは、maybe に関しては、35～50%とあり、多少の違いがある。例文や訳は次のとおり。Maybe the weather will clear by tomorrow.=The weather may clear ... (ひょっとすると明日までに晴れるかもしれない。) 「I think maybe ... として用いることも多い」ともある。Maybe they will come and maybe they won't. (彼らはひょっとすると来るかもしれないし、来ないかもしれない。) Maybe some other time. (またいつかね。) 次に「遠回しに」との項目を設け、訳語には「…のようだ」を挙げている。例文と訳は、次のとおり。Maybe I'll move somewhere. (どこかに引っ越しでもしようかな。) Maybe you are wrong. (君が間違っているということもありうる。) ここの、掲げてある訳語と例文の訳語が同じではない。次に「部分的賛成」との項目を掲げ、訳語として「それはそうだが (perhaps)」を挙げている。例文と訳は、次のとおり。He will try, maybe he will not succeed. (彼はやってみることはやってみるでしょうが、うまくいかないでしょう。) 最後に「質問を受けて」との項目を立て、訳語として「たぶんね (perhaps)」を挙げている。例文と訳は、次の

とおりの。“Will he come?” “Maybe.” “[Maybe not.]” (「彼は来ますか。」「たぶんね。」「来ないかも。」) この後に語法の欄が設けてあり、次の説明がある。「(質問の答えとして) 相手の質問に対して、Yes か No かの態度を明確にしたくない時に用いられる。その場合、否定的な意味合いを持つことが多い。」

perhaps (p. 1567) では、訳語としては「ことによると、ひょっとしたら、あるいは」を与えている。「ことによると、ひょっとしたら」の二つは太字で示してある。「maybe よりも堅い表現；話し手の確信度については、語法の欄を」とある。例文と訳は、次のとおり。Perhaps they will come soon. = They will perhaps come soon. = They will come soon, perhaps. (彼らはもしかするとまもなくやって来るかもしれない。= They may (possibly) come soon.) Perhaps that's true. (あるいはそれは本当かもしれない。) 上記の例文の訳には、最初に掲げてある訳語とは異なる訳語が用いてあるが、同じ訳語を用いる方が、混乱を避ける意味で良かったではと思われる。後の事例でも、初めに掲げてある訳語と、例文の訳語が同じでないものが見られる。確信の度合いについては、以下の記述がある。「30% 以下 possibly, 30% 以上 perhaps, 35 ~ 50% maybe, 65% 以上 likely, 70% 以上 probably, presumably, 80% 以上 doubtless, 90% 以上 inevitably, necessarily, unquestionably, undoubtedly, 95% 以上 definitely, certainly」次に「発言の断定性を弱める」との項目を挙げ、訳語としては「…のようだ、たぶんそうだろう、まあね」を添えている。「…のようだ」は太字になっている。例文と訳は、次のとおり。Perhaps you're driving too fast. (スピードを出し過ぎじゃないか。) I think perhaps he's troubled about something. (彼は何かのトラブルに泣き込まれているのでしょうか。) “It's a bit colder today.” “Well, perhaps so.” (「今日は少し寒いね。」「ああそうだね。」) This is perhaps her best novel. (おそらくこれが彼女の最高の小説だろう。) “I suppose they are not going to help me.” “Perhaps not.” (「彼らは私を手伝ってくれないと思う。」「たぶん、だめでしょう。」)

possibly (p. 1628) では、訳語として「ことによると、ひょっとしたら、(最上級をやや弱めて) おそらく」を挙げていて、「ことによると」は太字になっている。また、「実現の可能性の度合いについては→ perhaps」との案内がある。例文と訳は、次のとおり。Possibly she will come here. = She will possibly come here. (彼女はひょっとしたらここへ来るだろう。= It is possible she will come here. 時に = That she will come here is possible. will の代わりに may にすれば確率がいっそう低くなる。) He is possibly the best man for the job. (彼はおそらくその仕事の最適者だ。)

6 の probably (p. 1104) では、訳語として「たぶん、おそらく」が挙げてあり、「たぶん」が赤字になっている。この後に、類語の likely を参照するよう案内がある。例文と訳は、次のとお

り。John will probably pass the exam = Probably John will pass the exam. = It's probable that John will pass the exam.) (ジョンはたぶん試験に受かるだろう。) She probably won't help. (彼女は手伝わないでしょう。) "Is Liz coming tomorrow?" "Probably." "[Probably not.]" (「リズはあした来るかな。」「たぶんね。」「たぶん来ないね。」)

likely (p. 808) では訳語として「(普通は very, most, quite と共に用いて) たぶん, おそらく」を挙げている。「たぶん」が太字になっているが赤字ではない。例文と訳語は、次のとおり。You're very likely right. (たぶんあなたは正しいでしょう。) Most likely he will refuse our request. (恐らく彼は私たちの依頼を断るだろう。) You've likely heard the gossip. (たぶんうわさを聞いてるでしょう。) この後に、類語に関しての欄が設けてあり、可能性の高い順から以下のように並べてある。1. always (いつも) 2. certainly (確かに) 3. very likely, most likely (たぶん) 4. probably (たぶん) 5. likely (たぶん) 6. maybe, perhaps (もしかすると) 7. possibly (ことによると) 8. almost never, hardly, hardly (scarcely) ever (めったに [ほとんど] …ない) 9. never (どんな時でも…ない, 決して…ない) 他の大半の辞書では、likely が most や very や quite とよく用いられるとあり、また例文も添えてあるが、訳語だけからは、それがどの程度の確信度(可能性)があるのかは、分からなかったが、この辞典では、それが probably より高いことが示してあり、相対的な関係が分かりやすい。ただ、確信度(可能性)が、どの程度なのかは、訳語だけでは分からないので、数字(%による表示)も添えてあれば、なお良いと思われる。

maybe (p. 864) では訳語して「もしかしたら, ことによると, あるいは」を挙げ、「もしかしたら」は赤字になっている。likely を参照するように案内がある。例文と訳は、次のとおり。Maybe you're right. (あなたの言う通りかもしれない。) Maybe I'll go, and maybe I won't. (行くかもしれないし、行かないかもしれない。) Maybe it's true, but we don't know yet. (そうかもしれないが、まだわからない。) "Will John be successful?" "Maybe." "[Maybe not.]" (ジョンはうまくいくかな。いく [だめ] かもね。) となっている。この後に「maybe と perhaps はほぼ同じ意味・用法だが、maybe のほうが《略式》的、《米》では maybe のほうを多く用いる」とある。

perhaps (p. 1036) では、「ことによると, もしかしたら, たぶん」を挙げ、「ことによると」は赤字になっている。この後に、likely を参照するよう案内がある。例文と訳は、次のとおりである。Perhaps that's true. (あるいはそれは本当かもしれない。) Perhaps I'll come to see you next Sunday. (もしかすると次の日曜日にお伺いするかもしれません。) "Will it rain tomorrow?" "Perhaps." (「あしたは雨が降るでしょうか。」「かもね。」) "Doesn't she speak German?" "Perhaps not." (「彼女はドイツ語を話さないのでしょうか。」「そうかもしれません。」) この後に、欄が

設けてあり、「perhaps が表す起こる確率は半分以下であり、同様に（たぶん）という意味を表す probably や maybe よりも確率が低い」とある。先の likely の欄の記述では、perhaps と maybe は同じに扱われていたのに、ここでは、maybe より確率が低いとあり、矛盾しているように取れる。また、同じ訳語の「たぶん」を意味するとしながら、probably や maybe より確率が低い、というのがそもそも分かりづらい。確率が違うのであれば、訳語にも異なるものを与えるのが適切と思われる。

possibly (p. 1080) では訳語として「ことによると、もしかすると、あるいは」を挙げ、「ことによると」は赤字になっている。例文と訳は、次のとおり。“What caused the accident?” “Possibly, the driver fell asleep.”（「事故の原因は何ですか。」「もしかすると運転手が眠っていたのかもしれない。」）“Do you think Ken will marry her?” “Quite possibly.” “[Possibly not.]”（「ケン は彼女と結婚するかな。」「十分ありうるね。」[しないかもね。]）この最後の例文の会話の返答の quite possibly だが、訳には「十分ありえる」とあるが、先の likely の比較の欄の中にないので、この訳語だけからは、どれほどの確信度（可能性）があるのか、分からない。

7 は 6 と出版社は同じで、編集者と執筆者も重なっており、姉妹関係にある辞典のようである。probably (p. 1390) では訳語として「多分、恐らく」を挙げ、「多分」は赤字になっている。この後に、類語の likely の欄を参照するよう案内がある。例文と訳は、次のとおり。She is most (very) probably stuck in a traffic jam.（彼女は恐らく交通渋滞に巻き込まれたのだろう。）John will probably pass the exam. = Probably John will pass the exam.（ジョンは多分試験に受かるだろう。）“Is Mary coming tomorrow?” “Probably.” “[Probably not.]”（「多分ね。」[多分来ないでしょう。]）ここの例文と訳をそのまま読めば、most (very) likely の意味が「恐らく」で、likely 単独では「多分」の意味になると取れてしまう。これでは、確信度（可能性）の違いがあるのかどうか、分からない。

likely (pp. 1016-1017) では、訳語として「多分、恐らく」を挙げ、[普通, very, most, quite と共に用いる] としている。例文と訳は、You are very likely right.（多分あなたが正しいでしょう。）Most likely he will refuse our request.（恐らく彼は私たちの依頼を断るだろう。）He will quite likely come.（彼はまず間違いなく来る。）特に《米》では文中で単独で用いられることもある。You’ve likely heard the gossip.（多分うわさを聞いてるでしょう。）ここの例文と訳では、likely の前に何が来るかで、訳語が異なっている。これは、前に来る語次第で、確信度（可能性）に違いが出るということの意味しているように取れる。この後に、類語を確信度（可能性）に関して高い方から低い方へ、次のように順に並べている。1. always（いつも）2. certainly（確かに）3. very likely, most likely（多分）4. probably（多分）5. likely（多分）6. maybe（もし

かすると) 7. possibly (もしかすると) 8. perhaps (ことによると) 9. almost never, hardly, hardly [scarcely] ever, (めったに [ほとんど] …ない) 10. never (どんな時でも…ない, 決して…ない) 6 とは、編集者や執筆者が重なっているのに、maybe, possibly, perhaps の順位が異なる。

maybe (p. 1084) では、訳語として「もしかしたら, ことによると, あるいは」を先ず挙げ、「もしかしたら」が赤字になっている。次に応答の場合の訳語として「そうですね」を挙げている。また、likely を参照するように案内がある。例文と訳は、次のとおりである。Maybe you're right. (あなたの言うとおりにかもしれない。) Maybe I'll go, and maybe I won't. (行くかもしれないし、行かないかもしれない。) "Will John be successful?" "Maybe." "[Maybe not.]" (「ジョンはうまくいくだろうか。」「もしかするとね。[もしかするとだめだね。]」) "Can I go with you?" "Maybe." (「一緒に行ってもいいか。」「まあね。」) となっている。

perhaps (p. 1304) では、訳語として「ことによると, もしかしたら, たぶん」を挙げ、「ことによると」が赤字になっている。likely を参照するよう案内がある。例文と訳は、次のとおりである。Perhaps that's true. (あるいはそれは本当かもしれない。) Perhaps I'll come to see you next Sunday. (もしかすると次の日曜日にお伺いするかもしれません。) When a diplomat says 'yes' he means 'perhaps'; when he says 'perhaps' he means 'no'; when he says 'no' he is no diplomat. (外交官が「イエス」と言ったら、それは「もしかしたら」の意味; 「もしかしたら」と言ったら、「ノー」の意味; 「ノー」と言ったら、その男はもう外交官ではない。) "Will it rain tomorrow?" "Perhaps" (「明日は雨が降るでしょうか。」「降るかもしれません。」) "Doesn't she speak German?" "Perhaps not." (「彼女はドイツ語を話さないのでしょうか。」「話さないのかもしれませんが。」)

possibly (p. 1360) では訳語として、「ことによると, もしかすると, あるいは」を挙げ、「ことによると」が赤字になっている。この後に、類語の likely を参照する案内がある。例文と訳は、"What caused the accident?" "Possibly the driver fell asleep." (「事故の原因は何ですか。」「もしかすると運転手が眠っていたのかもしれません。」) "Did he go to the office?" "Quite (Very) possibly." "[Possibly not.]" (「彼は会社に行ったのですか。」「もしかするとそうかも [そうでないかも] かもしれません。」) この訳から判断すると、この辞書では quite possibly の意味を、possibly 単独で用いる場合と同じと解しているようだが、話者の確信度は、実はかなり高くなる。3 では「十分可能性がある」、10 と 11 では「十分あり得る」、15 では「恐らく、十中八九」と訳してしており、訳が不適切と思われる。

8 の probably (p. 1424) では、訳語として「たぶん, おそらく, 十中八九は」を挙げ、「たぶん, おそらく」が太字になっている。例文と訳は、次のとおり He probably misses you. (彼はお

そらく君を恋しく思っているだろう。) I'll probably be a little late. (たぶん少し遅れるだろう。)
 “Will you come?” “Probably.” “[Probably not.]” (「行くかい?」「たぶんね。」「おそらくだめかも。)]) この後に類語の *perhaps* を参照するよう案内がある。

likely (p. 1054) では訳語として「たぶん、おそらく」を挙げている。この後に「《英》では通例、*quite*, *more*, *most*, *very* を伴う、《米》では副詞を伴うほかに、単独での用法もある」とある。例文と訳は、*She has most likely lost her way.* (彼女はどうも道に迷ったようだ。) *He'll be very likely (at) home tomorrow.* (彼はおそらく明日は家にいるでしょう。) となっている。この辞書の二つの例文と訳では、*most* や *very* を伴った場合、確信度が変わるのかどうかは分からない。この次に熟語の (*as*) *likely as not* 「おそらく、多分、どうやら…しそう」を紹介している。例文や訳は、次のとおり。*He'll fail, as likely as not.* (おそらく彼は失敗することだろう。)
Likely as not, her estimate won't be very good. (どうやら彼女の評価はあまりよくなさそうだ。) この後に熟語の *likely not* 「どんでもない、まさか」を挙げている。*perhaps* を参照するような案内はない。

maybe (p. 1122) では、訳語として「ことによると、たぶん、もしかしたら」を挙げ、全て太字になっている。例文と訳は、次のとおり。*Maybe it will rain.* (ことによると雨が降るかもしれない。)
 “Will you be there?” “Maybe.” (「あそこね行きますか。」「たぶんね。)]) *I think maybe I'll stay for a day or two.* (もしかしたら、一日、二日滞在するかもしれない。) この後に、類語の *perhaps* を参照するよう案内がある。

perhaps (p. 1340) では訳語として、「ことによると、もしかしたら、たぶん」を挙げ、全て太字になっている。例文と訳は、次のとおり。*Perhaps that's true.* (あるいはそれは本当かもしれない。)
 “Will he come?” “Perhaps.” “[Perhaps not.]” (「彼は来るだろうか。」「たぶんね。」「ことによると来ないかもね。)]) この後に類語に関して次の説明がある。「*perhaps* は可能性はあるが確実性はないことを示し、可能性の大小を問題にしない。*maybe* は *perhaps* と同義で口語で多く用いられる。*probably* は可能性が大きく非常にありそうなことを示す。*possibly* は *perhaps* とほぼ同義」

possibly (p. 1398) では訳語として「あるいは、ことによると」を挙げ、共に太字になっている。例文と訳は、次のとおり。*He may possibly recover.* (彼はひょっとしたら回復するかもしれない。)
 “Will he come?” “Possibly.” (「彼は来るだろうか。」「もしかするとね。)])

9 の *probably* (p. 1294) では、コアの意味を「(確かではないが) ほぼ」とし、訳語としては「おそらく、たぶん、おおかた」を挙げ、「おそらく、たぶん」が赤字になっている。この後に、類語の *perhaps* を参照するよう案内がある。例文と訳は、次のとおりである。*She's*

probably the most hardworking student in the class. (彼女はたぶんクラスで最も勤勉な学生だ。)
 Walter's is busy and will probably come late to the meeting. (ウォルターは忙しいから、おそらく遅れて会議に来るだろう。)
 They probably want to buy this house. (彼らはたぶんこの家を購入したがつているだろう。)
 This machine probably won't work well. (たぶんこの機械はうまく動かないだろう。)
 It will very (most) likely be a cold winter. (ほぼ間違いなく寒い冬になるだろう。)
 「very (most) likely は「十中八九 ほぼ間違いなく」という意味」との説明がある。

likely (p. 956) では訳語として、「おそらく」を赤字で挙げ、「しばしば very, more, most, quiteなどを前に置く」とある。例文と訳は、次のとおり。Bob has most likely gone home already. (ボブはおそらく家に帰ってしまっただろう。)
 He would very likely have come if she hadn't been here. (彼女がそこにいなかったなら、彼はおそらく来ただろう。)
 この二つの例文と訳では、most や very が前に置かれているが、訳語は「おそらく」のままであるので、これでは、意味(確信度)に違いがないように取れる。しかし、6では、mostなどが前に置かれると、probablyよりも確信度が高くなる、とある。次に、熟語 (as) likely as not = more likely than not = more than likely が紹介してある。例文と訳は、She'll end up marrying George, likely as not. (おそらく、彼女は結局ジョージと結婚するだろう。)
 類語の参照案内はない。

maybe (p. 1020) では訳語として「もしかすると、ことによると、おそらく、たぶん」を挙げ、「もしかすると」が赤字になっている。例文と訳は次のとおりである。Maybe she is working at the lab. (もしかすると彼女は実験室で作業をしているのかもしれない。)
 I couldn't get the job, maybe because I was too young. (例の仕事をもらえなかったんだ。もしかすると僕が若すぎたからだろう。)
 I'll send them a copy of the manual today, maybe. (今日中に彼らに手引書を発送します。たぶんね。)
 “Do you think he will come on time?” “Maybe.” “[Maybe not.]” (「彼は時間どおりに来ると思えますか。」「たぶんね。[いや来ないかもね。]」)

perhaps (p. 1216) ではコアの意味を「もしかすると、確信のなさを表す」とし、訳語として「もしかすると、ひょっとすると、ことによると、おそらく、たぶん」を挙げ、「もしかすると」と「たぶん」が赤字になっている。例文と訳は、次のとおり。Perhaps this will be a mild winter. (もしかすると今年は穏やかな冬になるかもしれない。)
 He was the most talented painter of his times. (彼はことによると彼の生きた時代で最も才能のある画家だったかもしれない。)
 “Will she come tonight?” “Perhaps.” “[Perhaps not.]” (「今夜彼女は来ますか。」「たぶんね。[たぶん来ないでしょう。]」)
 この後に類語の確信度(この辞書では確実度としている)についての以下の説明がある。「確実に (certainly), たぶん, 恐らく (probably), ことによると (perhaps, maybe), ひょっとすると (possibly), 全然…ない (never)」とあり、さらに「perhaps は maybe

と同じ意味合いで使用されるが、maybe より少し形式ばった感じを与える。また米語では maybe の方が使用頻度が高い。probably も [たぶん] の意味で用いられるが、確信の度合いは、maybe や perhaps よりも高く、肯定的な感じを与える、possibly は [ひょっとしたら] の意味で確信の度合いは、maybe や perhaps とほぼ同じくらいか、少し低い。」とある。

possibly (p. 1268) ではコアの意味として「もしかすると、ある事柄が正しいという可能性があることを表す。また実行可能性の有無を強調するためも使われる。」とし、訳語としては「もしかすると、ことによるよると、たぶん」を挙げ、「もしかすると」が赤字になっている。類語の perhaps を参照するよう案内がある。例文と訳語は、次のとおり。Possibly the fight has been delayed. (もしかすると飛行機が遅れているのかもしれない。) She is possibly the smartest student in this class. (この学校でいちばん頭がいい生徒は彼女かもしれない。) Our teacher will possibly move to another school next year. (私たちの先生は来年ほかの学校に行ってしまうかもしれない。) It may possibly be warmer than usual this winter. (今年の冬は例年より暖くなるかもしれない。may possibly は単に possibly よりさらに可能性が低くなる。) “Will you buy his new CD?” “Possibly.” “[Possibly not.]” (「彼の新しい CD を買うつもりかい。」「買うかもしれないね。[買わないかもしれないよ。]») “Do you think Roy stole the document?” “Quite possibly.” (「ロイがその書類を盗んだと思ってるのかい。」「かなりの線だね。」) 「quite, very などをつけるると確信の程度が高いことを表す。」とある。ただ、訳語の「かなりの線だね」だけでは、どれくらいの確信度なのか、はっきりしない。

10 の probably (p. 1281) では、訳語として「たぶん、きっと」を挙げ「たぶん」は太字になっている。例文と訳は、次のとおり。I’ll probably be home early tonight. = Probably I’ll be home early tonight. (私はたぶん今夜は早く帰るだろう。) Bob very (most) probably thinks he is correct. (十中八九、ボブは自分が正しいと思っている。) He should probably quit his job. (彼は仕事をやめるべきかもしれない。自分の意見を述べる際に発言を多少和らげることができる。) この後に、maybe, perhaps, probably の違いについて次の説明がある。「maybe と perhaps はどちらも [ひょっとした…かもしれない] の意味で、そうである可能性もあるが、どうなのかははっきりとはわからない場合に使い、日本語の [たぶん、おそらく] よりも確信度が低い。これに対して probably ははっきりとして確信を持って [たぶん…だろう] という場合に用いる。〈例〉Maybe (Perhaps) he told a lie. (ひょっとしたら彼はうそをついたのかもしれない。) Probably, he told a lie. (彼はたぶん [おそらく] うそをついたのだろう。) maybe と perhaps は同じ意味だが、maybe が口語。また、maybe は通例文頭で用いるが、perhaps は文中、文末でも用いる。probably は文頭または文中で用い、文末では用いない」

likely (p. 941) では、訳語として「たぶん、おそらく」を挙げ、「たぶん」が太字になっている。「《英では、very, more, most, quiteなどを伴わなければならない。米では単独でも用いることもある。》」との注がある。例文と訳は、次のとおり。I'd very likely say the same thing if I were you. (もしあなたと同じ立場ならたぶん同じことを言うでしょう。) Most likely he will pass the audition. (おそらく彼はオーディションに合格するだろう。) この辞典では、likelyに関して、訳語は与えてあるが、他の probably, maybe, perhaps, possibly との違いに関しては述べてないので、話者の確信度がどの程度なのかは、probably に近いだろうということは推察できるが、はっきりとは分からない。

maybe (p. 1005) では訳語として「もしかすると…かもしれない、ひょっとすると、たぶん」を挙げており、「もしかすると…かもしれない」は太字になっている。「断定を避けて発言を和らげる」とあり、また perhaps を参照するような案内がある。例文と訳は、Maybe she is right. (彼女の言うとおりのかもしれない。) となっている。

perhaps (p. 1201) では初めに「話し手の確信度、probably より低く、maybe と同じ、ただし、maybeの方がぐだけた表現」とあり、さらに probably を参照するよう案内がある。この後に、「もしかすると、ことによると」の訳語があり、「もしかすると」は太字になっている。maybe と同じとあるが、与えてある訳語は同じではない。例文と訳は、次のとおり。Perhaps you are right. (あなたの言うとおりのかもしれません。) He is perhaps the best cellist today. (彼はあるいは今日最高のチェロ奏者かもしれない。最上級による断定は避けつつ自分の意見を述べる。)

possibly (p. 1253) は訳語として、「もしかしたら、たぶん、あるいは」を挙げており、「もしかしたら」が太字になっている。Possibly she knows what happened. (ひょっとして彼女は何か起きたのか知ってるのかもしれない。= It is possible that she knows what happened.) “Do you think he did it?” “Quite possibly” (「それをやったのは彼だと思いますか。」「十分あり得るね。)」訳語だけしかないので、確信度は、上の perhaps や maybe と同じのように思える。また、quite が前に置かれた場合の、確信度がどの程度になるのかも、訳語だけからは分からない。

11 は上の 10 とは出版社が同じで、編集者や執筆者が一部重なっており、姉妹関係にあるようだ。ただ、11 は総項目数が約 10 万と多く上級者を対象としているようである。probably (p. 1519) では訳語として「たぶん、きっと」を挙げており、「たぶん」が太字になっている。例文と訳は、次のとおり。This portrait was probably made when he was in his later years. = Probably, this portrait was made when he was in his later years. (この肖像画はたぶん彼の晩年に描かれたものだろう。) He very (most) probably thinks he is correct. (十中八九、彼は自分が正しいと思っている。) He should probably quit his job. (彼は仕事をやめるべきかもしれない。自分の意見を述

べる際に発言を多少和らげる。) be probably true [right] (たぶん間違いない [正しい]) 後に、類語に関して以下の説明がある。「probably は確実性が高いことを意味する。 maybe, perhaps (もしかすると), possibly (ひょっとしたら) はいずれも (起こるか起こらないか, 事実か否かについての) 見込みや確実性がどちらもはっきりしないときに用いられる。 maybe は口語で (「かもね」といったニュアンスにつながり) 《米》で多く, perhaps は《英》で多い。 possibly は maybe, perhaps より可能性が低い場合に使う。(→ likely)」

likely (p. 1110) では上の 10 の likely と訳語、例文、訳語の全てが同じであるので、省略する。

maybe (p. 1188) では訳語として「もしかすると…かもしれない, ひょっとすると, perhaps より口語的」とある。「もしかすると…かもしれない」が太字になっている。この後に、「断定を避けて発言を和らげる」とあり、類語の probably を参照するよう案内もある。例文と訳は、次のとおり。 Maybe she is right. (彼女の言うとおりにかもしれない。) Maybe you'll feel better tomorrow. (明日には気分が良くなるかもしれない。) I'll call you back soon-maybe tonight. (早めにこちらからお電話します, 今晚にでも。) Maybe he will like it; maybe not. (彼はそれを気に入るかもしれないし, 気に入らないかもしれない。次にこの辞典では「応答」として項目を独立して設け、「どうだろう, そうですね, そうかもしれない」を訳語として挙げ、「yes, no の答えを避けて用いる。婉曲的な否定であることも多い。」との補足説明がある。例文と訳は、「Do you think he will win?» “Maybe.” (「彼が勝つと思いますか。」「どうかな。」) “He wouldn't tell the police.” “Maybe not.” (「彼は警察に言わないだろう。」「まあそうかな。」) “I think he should resign.” “Maybe not.” (「彼は辞職すべきと思うよ。」「どうでしょうね。」)

perhaps (p. 1420) でも、上の 10 の perhaps と殆ど同じ説明がなされているので、省略する。例文は 2 つあるがそのうちの 2 番目の文は下線の部分が異なるだけで、その文は He is perhaps the best cellist of the 20th century. (彼はあるいは 20 世紀最高のチェロ奏者かもしれない。最上級による断定を避けつつ自分の意見を述べる。)

possibly (p. 1486) は訳語として「もしかしたら, たぶん, あるいは」を挙げ、「もしかしたら」が太字になっている点までは、上の 10 の possibly のところと同じであるが、最後に probably を参照するような案内がある点が異なる。例文と訳だが、10 より 1 文だけ多い。同じ例文と訳は省略する。一つ多い例文と訳は、This is possibly the most important event in his career. (これはおそらく彼の経歴の中で最も重要な出来事だ。) となっている。

12 での probably (p. 1463) では、訳語として「たぶん」の一語だけを挙げて、赤字になっている。例文と訳は、次のとおり。 You are probably right. (たぶんきみの言うとおりにだろう。) The Italian team will probably advance to the second round. (イタリアチームはたぶん 2 回戦に進むだ

ろう。) この後に類語の欄が設けてあり以下の説明がある。「ことばを確率の数値で表すのは危険であるが、probably は6割以上の〔確率大〕を意味する。likely は5割以上、すなわち〔その可能性が大きい〕の意。しかし、most likely の形にすると、probably より高い確率になる。maybe と perhaps は5割以下、通常2～3割程度で〔たぶん〕よりも〔もしかしたら、…かもしれない〕に近い」この辞典の類語との違いの説明は丁寧で分かり易い。

likely (p. 1077) では訳語に「たぶん、おそらく」を挙げて、「たぶん」が赤字になっている。この後に「《英》では、most, very, quiteなどを伴うが、《米》では単独でも用いる」とあり、また probably を参照するようにとの案内がある。例文と訳は、次のとおり。Most likely it is true. (十中八九それは本当だろう。) A big earthquake will likely occur within ten years. (大きな地震が10年以内におきそうだ。) Your father's answer will most likely be yes. (お父さんの返事はきっとイエスよ。) most likely には「十中八九」と「きっと」の訳を与えていて、probably より可能性が高くなるとし、probably のところでの類語の解説の内容に合うようにしている。

maybe (p. 1152) では訳語としては「もしかしたら、…かもしれない」を挙げ、赤字になっている。この後に「半分以下、通常2～3割程度の確率を表す。perhaps よりくだけた語で《米》で好まれる。」とあり、また、probably を参照するような案内がある。例文と訳は、次のとおり。Maybe it will rain tomorrow. (もしかしたら、あす雨が降るかもしれない。) “Are you going to tell the teacher?” “Maybe (I will). I haven't decided yet.” (「先生に話すの？そうそうするかもしれない。」「まだ決めてない。)」 “Will Janet be at the party, too?” “Maybe she will, maybe she won't. I don't really know.” (「パーティーにジャネットは来るかな?」「来るかもしれないし、来ないかもしれない。よく知らない。)」 “I feel listless today.” “Maybe it's weather.” (「今日は体がだるい。」「たぶん天気せいだよ。)」

perhaps (p. 1380) では、訳語として「ことによると (…かもしれない)、もしかしたら、ひょっとしたら」を挙げ、初めの「ことによると (…かもしれない)」は赤字になっている。この後に「maybe より堅い語。起こる確率は半分またはそれ以下、通常2～3割程度」とあり、また probably を参照するようにとの案内がある。例文や訳は、次のとおり。Perhaps he was right. (ことによると彼の言うとおりであったのかもしれない。) It is perhaps true, we need evidence. (それは本当かもしれないが、証拠が必要だ。) He may perhaps succeed if he's lucky. (彼は運が良ければあるは成功するかもしれない。)

possibly (p. 1435) では訳語として「ひょっとしたら、もしかしたら、…かもしれない」を挙げ、「ひょっとした」は赤字になっている。そして「(その可能性はある) の意で、maybe よりさらに確率が低いニュアンス。」とある。例文と訳は、次のとおり。“Will Chuck be coming to

the party?” “Possibly, but I wouldn’t count on it.” (「チャックはパーティに来るかな?」「来るかもしれないが、あまり当てにしないがいい。’) I’m going to study abroad next summer, possibly in France. (私は来年の夏、留学することになった、ひょっとしたらフランスに。)

13 は 12 と編集主幹が同じで、執筆者も一部重なる姉妹関係にある辞書のようにある。probably (p. 1405) では、12 の probably と訳語は同じであるが、例文が一つ多い。その例文と訳は、次のとおり。You are most probably correct about the matter. (その件について、まずまちががなくきみが正しい。) 類語の説明では、12 での説明にさらに possibly が加えられ、「possibly はさらに確率が下がり [ひょっとしたら] に相当する」とある。

likely (p. 1016) に関しては、12 の likely と全て同じなので、省略する。

maybe (p. 1088) に関しても、12 の maybe と全て同じなので、省略する。

perhaps (p. 1321) に関しても、12 の perhaps と全て同じなので、省略する。

possibly (pp. 1375-1376) に関しては、12 の possibly の記述に加えて、次の太字の例文がある。What could possibly go wrong? (うまくいかないはずがないじゃないか、なんちゃって。[Murphy’s Law を土台にした皮肉を込めた表現で、通常の場合には「うまく行かない可能性のあるものはいずれ必ず失敗に終わる。どうせうまくいきっこないけどね。]) この後に possibly because (もしかしたら…という理由で) がある。先の類語の説明では [ひょっとしたら] に相当するとあるが、ここでの訳には「もしかしたら」が使われていて、不統一感がある。

14 の probably (p. 1386) では訳語として「たぶん、おそらく」を挙げ、「たぶん」は太字になっている。例文と訳は、次のとおり。You may very (most) probably be right. (あなたの方がまずまず間違いなく正しいでしょう。)” “Will he come tomorrow?” “Probably.” [“Probably not.”] (彼はあす来るでしょうか。)[「たぶんね。」][「たぶん来ないでしょう。)] この後に、類語と違いに触れて、「maybe, perhaps, possibly とは異なり、probably は確率が非常に高い (約 70 ~ 80%) ことを表す。」との説明がある。

likely (p. 1059) では、「おそらく、たぶん (probably)」を挙げ、「おそらく」は太字になっている。この記述からは、probably と同じ意味と取れてしまう。この後に「《英》では前に、most, very, quite, more, more than などを用いるのが普通、《米》では独立して用いる」とある。例文と訳などは、most likely (十中八九) が先ず挙げてあり、その後、I will most likely go to school tomorrow. (あすはたぶん学校に行きます。) がある。直前では、most likely に「十中八九」の訳語を与えていながら、ここでは「たぶん」となっている。他の多くの辞書にも言えるが、likely の前に most などが置かれると、確信度に違いがあるのかどうかの明確な説明が欲しい。訳語だけではここでの例のように分からない。

maybe (p. 1119) では、訳語として「たぶん、もしかすると、ことによると、おそらく」と四つの訳語を挙げ、「たぶん」が赤字になっている。probably でも「たぶん」の訳語が与えられており、しかも、赤字になっている。これでは、確実性（確信度）について、probably との違いが不明瞭である。補足説明として「perhaps とほぼ同義的、《米》で用いられることが多い。」とある。また、probably と perhaps を参照せよとの案内がある。例文と訳は、次の通り。Maybe I'm hearing things. (僕のそら耳かもしれない。) Maybe she will come, maybe she won't. (彼女は来るかもしれないし、来ないかもしれない。)

perhaps (p. 1313) では、他の辞書とは異なる分類をしている。まず「確信が持てないとき」としての訳語として「もしかしたら、たぶん」を挙げている。「もしかしたら」は赤字になっている。例文と訳は、次の通り。Perhaps he has lost it. (彼はことによるとそれをなくしたのかもしれない。) 先に掲げてある訳語とは異なる「ことによると」が使われている。次に「断定を避けて」として、訳語には「…かもしれない」を挙げている。例文と訳は、次のとおり。He may claim, perhaps, that he is correct, but he isn't. (ひょっとしたら彼は自分が正しいと主張するかもしれないが、そんなことはない。) 下に語法の欄があり、次の説明がある。「perhaps は《英》で、maybe は《米》で多用される。不確実性を意味し、確実度は50%以下。類語を確実度の高い順に並べるとおよそ次のようになる。certainly → absolutely, necessarily → presumably → probably → likely → possibly → perhaps, maybe」この辞書では、possibly が perhaps や maybe より確実度が高いとしているが、これは誤りと思われる。

possibly (p. 1360) では訳語として、「ひょっとすると、ことによると、…かもしれない」を挙げ、「ひょっとすると」は太字になっている。この後に「perhaps, maybe より起こる可能性が低く、20%くらいの度合い」とある。例文と訳は、次のとおり。Possibly you have forgotten about me. (ひょっとすると私のことをすっかりお忘れかもしれませんが。) “Will they get divorced?” “Possibly not.” (「彼らは離婚するだろうか。」「たぶんしないだろう。)」初めの訳語としては「ひょっとすると、ことによると、…かもしれない」を挙げているながら、否定語と一緒に使われた場合の訳に「たぶん」が当てである。説明が欲しいところである。

15の probably (p. 1306) では訳語として「恐らく、十中八九は、たぶん」を挙げており、「恐らく」は赤字になっている。例文と訳は、次のとおり。“Are you going to the meeting?” “Yes, probably.” (「会議には出ますか。」「ええ。たぶん。)」You'll probably feel better after some sleep. (少し眠ればおそらく気分はよくなりますよ。) probably not (恐らく…ない) “Are you going to invite John?” “Probably, not.” (「ジョンは招待しますか。」「いや、たぶんしないと思います。)」very (most) likely (ほぼ確実に) この表現の例文はない。

likely (p. 945) では訳語として「恐らく、たぶん」を挙げ、「恐らく」は赤字になっている。probably の訳語と比較すると「十中八九」がないだけで、確信度の違いがよく分からない。この後に most likely (きつと、まず間違いなく) とある。例文と訳は、次のとおり。She's most likely dead by now. (きつと彼女はもう死んでるだろう。)

maybe (p. 1012) では訳語として「たぶん、ことによると」を挙げて。「たぶん」が赤字になっている。例文と訳は、次のとおり。“Do you think she'll come back?” “Maybe.” (「彼女は戻って来ると思うかい。」「たぶんね。」) Maybe she just made a mistake. (たぶん彼女は間違えたただけだろう。) maybe not (たぶん…ないだろう、…ないかもしれない) Maybe they were right, or maybe not. (彼らは正しかったかもしれないし、そうでなかったかもしれない。) maybe so (話) (たぶんそうだろう、そうかもしれない) この後に同意 perhaps とある。

perhaps (p. 1221) では訳語として「たぶん、ことによると、もしかすると」が挙げてあり、「たぶん」が赤字になっている。例文と訳は、次のとおり。Perhaps she's in the garden. (彼女は庭にいるかもしれないよ。) “I think it'll rain.” “Yes, perhaps.” (「雨になりそうね。」「ああ、たぶんね。」) perhaps not (否定的な発言に対して同意を表して「たぶんそうだろう」) This is, perhaps, her finest novel. (〔断定的に言うのを避けて〕恐らく、これが彼女のこれまでの最高傑作だろう) 下に類語の欄があり、次の記述がある。「perhaps と maybe はともに [たぶん] を意味する。《米》では maybe のほうがよく用いられる。perhaps のほうがフォーマル。possibly も [たぶん、もしかしたら] などを意味し、確信度は、perhaps と maybe とあまり変わらない。probably は確信度が高く [恐らく、十中八九] などを意味する。」他の類語の項にも、perhaps を参照するような案内が欲しい。

possibly (p. 1278) では訳語として「たぶん、もしかすると、ひょっとすると」を挙げ、「たぶん」が赤字になっている。例文と訳は次のとおり。He's going to stay three weeks, possibly longer. (彼は3週間、たぶんもっと長く滞在するだろう。) quite (very) possibly (恐らく、十中八九) この後に maybe, perhaps と同意とある。この辞典では、先の説明にもあったが、maybe, perhaps, possibly を同意としている。他の大半の辞典では maybe と perhaps は同意としているが、possibly は同意としては扱っていない。また、確信度の違いを数字 (%) では示していない。

3. 記述内容の全体的分析・検討

3.1. 訳語について

各副詞の初めに（対話文の返答ではなく）平叙文の中で使われる場合の訳語として挙げてある語を以下の表1にまとめてみた。下線は筆者による。

表1

	probably	likely	maybe	perhaps	possibly
1	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u> , 十中八九	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	ひょっとすると、ことに よると、…かもしれない	もしかすると、 ひょっとすると、 <u>たぶん</u>	ひょっとすると、 ことによると、 <u>たぶん</u>
2	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u> , 十中八九	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	ひょっとすると、ことに よると、もしかすると、 あるいは、おそらく	もしかすると、ひょっとする と、ことによると、 <u>たぶん</u>	ひょっとすると、 ことによると
3	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u> , 十中八九	<u>おそらく</u> , <u>たぶん</u>	もしかすると、 <u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	ひょっとすると、 <u>おそらく</u> 、 <u>かもしれない</u>	ことによると、 もしかすると
4	<u>たぶん</u> , 十中八九, <u>おそらく</u>	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	もしかしたら、 ことによると、 <u>たぶん</u>	ことによると、ひょっとした ら、 <u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	ことによると、 もしかすると
5	<u>たぶん</u> , 十中八九, <u>おそらく</u>	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	ことによると、 もしかしたら、 ひょっとしたら	ことによると、あるいは ひょっとしたら	ことによると、 <u>おそらく</u> ひょっとしたら、
6	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	もしかしたら、 ことによると、あるいは	ことによると、 <u>たぶん</u> もしかしたら、	ことによると、あるいは もしかすると、
7	<u>多分</u> , <u>恐らく</u>	<u>多分</u> , <u>恐らく</u>	もしかしたら、あるいは ことによると	ことによると、 <u>たぶん</u> もしかしたら	あるいは、ことによると
8	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u> 十中八九は	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	ことによると、 <u>たぶん</u> もしかしたら	ことによると、 <u>たぶん</u> もしかしたら	あるいは、ことによると
9	<u>おそらく</u> , <u>たぶん</u> , おおかた	<u>おそらく</u>	もしかすると、 <u>たぶん</u> ことによると、 <u>おそらく</u>	もしかすると、 <u>たぶん</u> ことによると、 ひょっとすると	もしかすると、 <u>たぶん</u> ことによると
10	<u>たぶん</u> , <u>きっと</u>	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	ひょっとすると、 <u>たぶん</u> , もしかすると… <u>かもしれ</u> <u>ない</u>	もしかすると、 ことによると	もしかしたら、 <u>たぶん</u> あるいは
11	<u>たぶん</u> , <u>きっと</u>	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	もしかすると… <u>かもしれ</u> <u>ない</u> 、ひょっとすると	もしかすると ことによると	もしかしたら、 <u>たぶん</u> あるいは
12	<u>たぶん</u>	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	もしかしたら … <u>かもしれない</u>	ことによると（… <u>かもしれ</u> <u>ない</u> ）、もしかしたら ひょっとしたら	ひょっとしたら もしかしたら … <u>かもしれない</u>
13	<u>たぶん</u>	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	もしかしたら … <u>かもしれない</u>	ことによると（… <u>かもしれ</u> <u>ない</u> ）、もしかしたら ひょっとしたら	ひょっとしたら もしかしたら … <u>かもしれない</u>
14	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u>	<u>おそらく</u> , <u>たぶん</u>	<u>たぶん</u> , <u>おそらく</u> もしかすると、 ことによると、	もしかしたら、 <u>たぶん</u>	ひょっとすると、 ことによると … <u>かもしれない</u>
15	<u>恐らく</u> , 十中八九は, <u>たぶん</u>	<u>恐らく</u> , <u>たぶん</u>	<u>たぶん</u> , ことによると	<u>たぶん</u> , ことによると もしかすると	<u>たぶん</u> , <u>もしかすると</u> ひょっとすると

上の表1を見ると、「たぶん」と「おそらく」という言葉が多用されていることが分かる。特に「たぶん」が顕著で、確信度の一番高い probably から、一番低い possibly まで全てに訳語

として使われている。このことが、これらの副詞のそれぞれの正確な意味合いを曖昧で不明瞭にしている要因の一つになっていると思われる。日本語の「たぶん」が持つ確信度についての意味の幅が広いために、どの語の訳にも用いられていると思われるが、これがそれぞれの副詞の正確な意味合いをかえって不明瞭にしていると思われる。probably も「たぶん」で possibly も「たぶん」と理解してしまうと、違いが全く分からない。

根本の問題は、確信度に関して、それぞれの副詞にぴったりの、またはかなり近い言葉が日本語にないことに起因していると思われる。なので、こうした問題を避けるには、訳語による説明よりも、数字 (%) による表示を主にし、訳語を副にするのが適切と思われる。ただ、12の指摘にあるように言葉を数字で示すことも危険で問題はあるが、訳語だけや訳語を主にするよりも、確信度に関しては、正確な理解を得やすいはずである。具体例を提案すれば、probably について次のような説明をしてはどうか。「話者の確信度は 60～80% くらいで、高い確信度を表す。日本語には完全に対応する言葉はない。近い言葉としては [おそらくきつと]、[たぶんおおかた] [十中八九] あたりになる」こうすることで、話者の確信度を把握できる。加えて、日本語にはぴったり当てはまる言葉はないが、「おそらくきつと」「たぶんおおかた」「十中八九」をあくまでも近似値として使用するしかない、ということを理解させることが期待される。likely に関しては、「話者の確信度は 50～70% くらい。日本語に完全に対応する言葉はない。近い言葉としては [たぶん]「おそらく」あたりだが、あくまで近似値」maybe と perhaps に関しては「話者の確信度は 50% 以下で、通常 20～40% くらいで、日本語には完全に対応する言葉はない。[もしかしたら] [ことによると] […かもしれない] が近似値」possibly に関しては「話者の確信度は 20% 未満で低い。日本語に完全に対応する言葉はない。[ひよっとすると…もありえる] くらいが近似値。ただし、quite や very が前に置かれると確信度は急に高くなり、probably に近くなる。」

3.2. very (more, most) likely と very (quite) possibly について

まず、likely 関しての記述では、1 と 15 以外には「very, more, most などを前に伴う」とある。ただ、15 には記述はないが「most likely (きつと, まず間違いなく)」と例文を紹介している。そして、前に very, more, most などが置かれた場合、単独で用いられた場合に比べて、確信度が高まることに関して、それが訳語で分かるものは、4, 6, 7, 12, 13, 14, 15 の 7 冊である。ただ、4 には例文はなく、very (most) likely (十中八九, たいがい) としている。6 は、例文と訳のところでは、very likely に「たぶん」を与え、most likely には「恐らく」を与えていて、これでは、単独で用いる場合との違いが分からないが、類語の欄のところでは、very

(most) likely が probably より確信度が高いと表示してある。しかし、ここでの訳語は、単独の likely や probably と同じく「たぶん」になっている。この事例は、訳語のみで、確信度を正確に理解させることがいかに困難であるかを物語っている。7では、例文の中で、most likely の訳が「恐らく」で、quite likely の訳が「まず間違いなく」になっていて、quite likelyの方が確信度が高いと思わせる訳になっている。しかし、これも、混乱を招きやすい。14では、最初に most likely の訳語として「十中八九」を与えていながら、例文の中の most likely では「たぶん」を与えており、統一性がなく、混乱を招く。

このように、「likely の前に very, more, mostなどを伴う」との記述があっても、訳語に十分な配慮や説明がないものが多く、確信度がどの程度なのか、明確には分かりにくい。very, more, mostなどがlikelyの前に来た場合、確信度がprobablyより高くなるのであれば、それをはっきりと述べ、訳語にももっと配慮し、加えて、確信度を数字(%)で示すことが良いと思われる。3.1で述べたように、訳語だけで、確信度を正確に伝えることは、無理と思われる。

very (quite) possibly についてはどうであろうか。15冊の中でこの表現を紹介しているのは、3, 6, 7, 9, 15の6冊。この表現の意味が正確に推察できるのであれば、紹介の必要はないと思われる。しかし、この表現の意味(話者の確信度)は、実は、possibly 単独の場合とは異なり、確信度は高くなるようだ。3では「十分可能性がある」、6では「十分あり得る」、7では「もしかすると…かもしれない」、9では「かなりの線で」、10では「十分あり得る」、15では「おそらく、十中八九」とある。7を除いた他の、3, 6, 9, 10, 15では確信度がpossibly 単独の使用の場合と異なり、高くなることを示す訳語が与えてある。しかし、これまた、訳語だけからは、どの程度の確信度なのか、likely や probably に対してどうなのかはよく分からない。おおまかでも数字(%)で示してあれば理解は明確になろう。

3.3 数字(%)による表示

15冊の辞書の中で数字を用いて話者の確信度について説明しているのは、1, 2, 3, 5, 12, 13, 14の7冊の約半数である。もちろん、辞書によっては、数値に多少の差はある。しかし、言葉(訳語)だけによる説明よりは、はるに確信度は分かり易い。言葉だけでは、表1からも分かるように、probably と likely の違い、それと maybe, perhaps と possibly の違い、さらには very (more, most) likely や very (quite) possibly も確信度が、likely や possibly を単独で用いた場合と比べて、高くなることは訳語からある程度は推察できても、正確なところは分からない。

4. むすびにかえて

日本の学習英和辞典は、文型の表示、コロケーションの紹介、比較文化の視点の解説など多くの点で目覚ましい進展を遂げて来ていると言われており、執筆者ならびに関係者のご努力には敬意を表する次第である。ただ、今回取り上げた話者の確信度を表す副詞の説明には、改善の余地があるのではと思われる辞書も少なからず見られた。本稿が辞書編纂関係者の目にも留り、次の改訂判等で、話者の確信度を表す語句のより分かり易い説明の参考になれば、幸いである。

注 本稿の執筆中で気付いた誤りと思われる箇所に関しては、出版社に連絡しており、「訂正します」との返事をいただいている。よって、この論考が出てる時点では訂正されている可能性が高い。また、他の辞書においても、改訂版等で、記述内容や項数が変わっている可能性があることをお断りしておきたい。

Summary

A Survey on How the Usages of the Adverbs “probably”, “likely”, “perhaps”, “maybe”, and “possibly” are Explained in English-Japanese Dictionaries.

It was found that the students in my English classes had almost no understanding about differences in the speaker’s degree of certainty regarding the adverbs “probably”, “likely”, “perhaps”, “maybe” and “possibly”, though the correct use of them is critical for English users.

One of the main reasons for the students’ lack knowledge of the differences in meaning of the five adverbs seems to be attributed to explanations of those adverbs in English-Japanese dictionaries.

An analysis of English-Japanese dictionaries has shown that the majority of those dictionaries fail to explain the differences in the level of the speaker’s confidence by using percentages. Many English-Japanese dictionaries just give Japanese adverbs which sound a little close in meaning to those English adverbs; however, in fact, those Japanese words do not show clearly the speaker’s degree of certainty.

The Japanese word *tabun* is given in many of those dictionaries as a translation for each of the five adverbs, which seems to make the differences in the speaker’s certainty all the more ambiguous to grasp.

In order to help Japanese learners of English to have better understanding of the differences in the degree of speaker’s confidence, it is desirable that the differences be explained mainly by using percentages and secondarily by giving Japanese words.